

「それも立派な自立だよ」 そう言える社会を目指したい

亀口公一さん(NPO法人アジール舎会長、臨床発達心理士)

「子ども先生」から届いた年賀状

アジール舎(京都府宇治市)は、発達障がい、自閉症、ひきこもり、不登校などの子どもとその親をサポートするNPO法人です。40年にわたり子どもの療育に携わってきたアジール舎会長の亀口公一さんに、ニートとひきこもりについてお話を伺いました。

40年間、子ども、とりわけ支援を必要とする子どもと向き合ってきました。ニート、ひきこもりに対しては、私自身、大きな問題意識を持っています。

8年前、民間の子ども療育機関としてアジール舎を立ち上げました。その原点となったのが、学生時代に出会った3人の小学生です。脳性マヒの女の子、自閉症の男の子、ダウン症の女の子。この子たちに、自分は何ができるのか。これが今の私の出発点です。

自閉症の男の子、A君としておきますが、当時5歳のA君は、私の卒論の対象児で、いわばA君は私の子ども先生です。現在45歳になったA君は、精密機械の旋盤工をしています。アスペルガー(※1)の傾向があり、今もほとんど人と会話はできません。A君からは昨年、さっそうと

馬に乗る自分の姿を印刷した年賀状が届きました。彼は馬とは会話ができません。この年賀状は、私の宝物です。

私が大学で学んでいた時代は、「自閉傾向」と呼んでいました。それが今では「自閉症」と診断されることが増えました。ここに「健常者か、障害者か」という、人間をある特徴でひとくくりにする風潮を感じます。日常生活におけるレッテルのかたちで、健常と障害の区別をもっともらしく捉えてしまうわけです。

世界共通の「障害者の権利に関する条約」のなかに、「障害のある子どもの『発達しつつある能力』と『変わらない主体性を保持すること』

1950年福岡県生まれ。京都教育大学に在学中、自閉症やダウン症の子どもたちと出会い「臨床心理学」を志す。公立の障害児療育施設「乙訓ポニーの学校」と通所授産施設「乙訓若竹苑」で32年間、知的障害、身体障害、発達障害の子どもや大人と過ごす。同所を定年前退職後、元小学校教員の妻・誠子さん、長女で社会教育を研究する亀口まかさん、まかさんの夫で元編集者の原田康信さんとアジール舎を創設。現在は同団体会長と「アジール心理発達相談室」室長を務める。



の両方を尊重する」という意味の英文があります。ここでいう「主体性」とは「自分らしさ」です。A君の場合、アスペルガー的な部分は自分らしさであり、変える必要がありません。そのかわり、発達していく能力は持っています。馬を乗りこなすことも、そうなのかもしれません。

変わる能力と自分らしさを、同時に成り立たせていくのが発達療育です。ところが、発達療育と公的な学校教育は、対立しがちです。人間教育から離れ、教科教育だけになってしまったことで、多様な子どもを受け止めることのできない学校環境になってしまいました。ここに、ニートとひきこもりを生んだ原因もあると私は考えています。

「今を生きられない」つらい

「将来に希望が持てないから、ニートやひきこもりになるのでは？」と質問を受けたことがあります。私は違うと思います。

将来に希望が持てないからではなく、**今**が生きづらいんです。「将来の希望」を云々するのは、親であり、社会です。

今の社会は、子どもを「小さな大人」として扱い、大人と同じ責任を与えようとして

います。小さな労働者、小さな消費者、小さな兵隊。そのことの重圧が、子どもの生きづらさにつながってしまうのではないかと。

子どもは今を生きています。今を生きるから、子どもです。その今を生きないところに、問題の本質を感じます。でも、子どもは、今を生きられないつらさを発信できません。

一方、親は、子どもらしさから早く卒業させ分別のある「小さな大人」に育てようとする。結局、子どもは「今を生きる」実感を持っていません。年を重ねていく……。それがニート、ひきこもりの問題にもつながるのではないのでしょうか。ここで触れたいのが、「何歳までが子どもなのか」という問題です。児童福祉法では、18歳までが子ども(※2)とされます。また、創設臓器移植法では、意思表示ができない15歳までの子どもは、移植医療の対象ではなかった。ところが、5年前の改正によって、15歳未満の子どもも大人と同様に移植医療の対象になりました。

私は、社会的弱者である子どもの権利が本当に守られているのか、大変危惧しています。

「経済的自立」へのイメージ

子どもたちはなぜ、今を生きづらいのか。その理由のひとつが、「自立」に対する世間の狭く、貧しいイメージではないでしょうか。

アジール舎では「身辺的自立」「精神的自立」「経済的自立」の3つを掲げていますが、本来幅広い意味を持つはずの「自立」が、「経済的自立」だけに食いつくされていく気がします。

生活費を自分で稼ぐのが「経済的自立」。それができないと、怠け者や落伍者のレッテルを貼られてしまう。

でも、人間は互いに稼ぎあっているわけで、金額の多寡で「自立した」とは決められません。「生活費を自分で稼いでこそ自立なのよ」と言う親の気持ちもわかりますが、ニート、ひきこもりからの一歩を考えるのであれば、親を含めた社会全体が「経済的自立」の持つイメージを広げていくべきです。

一度も働いたことのない若者が、週に1日だけパン屋で働き始めたといいます。「立派な自立だよ」と言うべきなんです。一歩という意味では、1日1時間でも、週に1日でもいいんです。自宅と仕事場を行き来するなかで、風景を見、太陽の光を浴び、人と会う。そこから得るもの大きさ。それがそが「一歩」です。「自分は社会に参与しているんだ」という気持ちだが、結果的に自立につながります。

自立の問題は、福祉の問題にもつながります。障害基礎年金のように、社会が支援する部分と当事者が自分で努力する部分、公と民それぞれの支え、そのブレンドが重要です。このブレンドの仕組みづくりが、日本は下手くそ

宇治市内の閑静な住宅街にあるアジール舎の活動拠点「ころぼっくるの家」。「集い」「相談」「学び」の場を創出し、地域の居場所としての役割も果たしている。



NPO法人アジール舎
2007年設立。2008年、宇治市内に活動拠点「ころぼっくるの家」を開設。発達に特別なニーズを持つ子どもたち(対象は主に中学3年生まで)とその親をサポートすべく、「児童デイころぼっくる」「アジール心理発達相談室」「子ども発達相談室 ぴりか」「アジール親子塾」「情報交流スペース すぶりんぐ」といった支援事業に取り組む。『のんびる』8月号特集に合わせ、今年7~9月には図書展「戦後70年の夏に読みたい本」(右下写真)を開催。

〒611-0041 京都府宇治市榎島町大幡26
【TEL & FAX】0774-34-2382
(月~土9:00~17:30)
【Eメール】info@asile-sya.com
http://www.asile-sya.com/

アジール舎 検索



(※1) アスペルガー症候群、アスペルガー障害。広汎性発達障害のひとつで、特定のものに興味を示したり、コミュニケーションに支障をきたしたりする。

(※2) 児童福祉法では「小学校就学の始期から、満十八歳に達するまでの者」を「少年」と定義。



「ころぼっくるの家」施設長で社会福祉士の原田康信さんと療育指導員の森衣里さん。アジール舎には、若手スタッフが多い。

です。「社会がまるごと支えるか」「自立するか」という極端な選択肢しかないんです。

「啐啄同機」から学ぶこと

私は、ご兄弟で10年以上ひきこもっているご家庭の親御さんから、ときどき相談を受けています。「俺は生まれてこなければよかった」「親が子どもを産むのは犯罪だ」と家で口にしてるそうです。

今を生きられないから、強烈な自己否定につながってしまいます。青春時代に自己否定はつきものかもしれませんが、同じ自己否定でも、もっと深い間を感じます。私の好きな禅の思想から生まれた「啐啄同機」という言葉があります。「啐」は雛が卵の内側から「準備ができたから出たいよ」とたたく音。「啄」は親鳥が「出ておいで」と卵をたたいて、雛を出やすくする音です。両方のタイミングがずれると、雛は外に出られず死んでしまいます。

ニートとひきこもりの場合、個々のケースでいっとは言えませんが、比較的早い段階で「啐啄同機」ができれば、問題が長期化しません。しかし、タイミングを失うと、親も

子も疲弊してしまい、解決が難しくなります。「啐啄同機」は相談を受ける側にも課せられています。倒れかかった木があるとき、それを元に戻すために寄り添うのか、これ以上倒れないために寄り添うのか。どちらの寄り添いが必要なか、相手を理解したうえで、介入するタイミングを考える。当事者の目線から見たうえで、の支援のあり方が、療育に携わる私たちに問われています。

足し算で地域を耕す

さきほどのひきこもりのお兄さんのケースですが、自動車の絵を上手に描くそうです。こうした話を聞くと、職人仕事に問題を解決するヒントがあるような気がします。

大工さん、伝統工芸の職人、パン屋さん、和菓子職人、イラストレーター、なんでもいいです。ニート、ひきこもりの若者のなかには、手持ちで用意できるもので何かを作り上げる、職人仕事得意な子がけっこういます。こうした仕事は減りましたが、消えたわけではありませんが、そのかわり、こうした仕事は、自分で見つけるしかありません。そこをどう周りの人間がサポートしていくのか、です。

今の職人仕事の話は、足し算の発想なんです。今の状況に、なにか足し算をすることで、なんらかの自信や肯定感を得ていく。とってつ

けたような足し算ではなく、当事者が肯定感を得られるような足し算を、どう提案していくのか。そこそが、人がつながり、社会を変えていくための力になっていくはずですよ。

足し算の発想は、地域づくりも同じです。この雑誌(『のんびる』)が取り上げるコミュニティカフェといった取り組みは、地域資源という意味での足し算です。若い人が集い、輝ける場。若い人が運営する場。職人仕事も含め、いろいろとあるはずですよ。

ニートとひきこもりを生んだ背景には、地域が失われたことも大きいと思います。地域が本来持っていた多様性が、アスファルトみたいな一色となってしまった。山、川、空き地といった、子どもにとっての自由な空間、誰からも統治されていない場、つまりアジール(※3)な場が、地域から失われたのです。

必要なのは、地域を耕すことです。そのためには、土を知り、使う道具を考え、足し算の発想を持ち、それぞれの地域にとっての耕し方に取り組むことです。「地域のなかに、ひとりでも自分を応援してくれる人がいる」。それを知ること、若者たちは自己否定をせずに、地域にふみとどまることができます。「うちの子や孫は、ニートでも、ひきこもりでもない」ではなく、地域全体の課題として捉えることが、この問題を解決する一歩ではないでしょうか。

(談)

(※3) [Asile] 歴史的・社会的な概念で使われる言葉で「聖域」「自由な領域」「統治権力が及ばない地域」などを指す。